

家康公一代記 全

特60

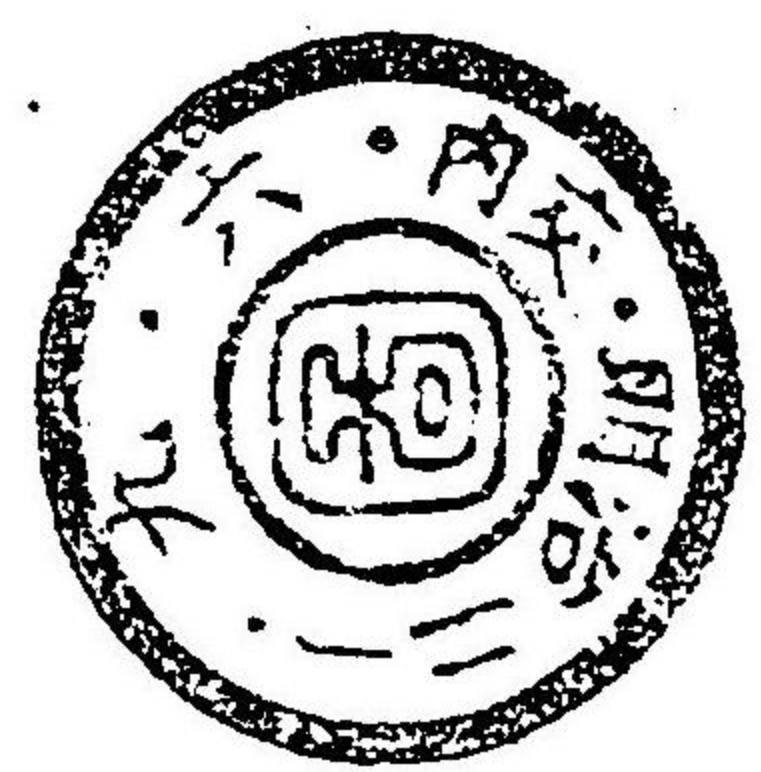
330

特 60
330

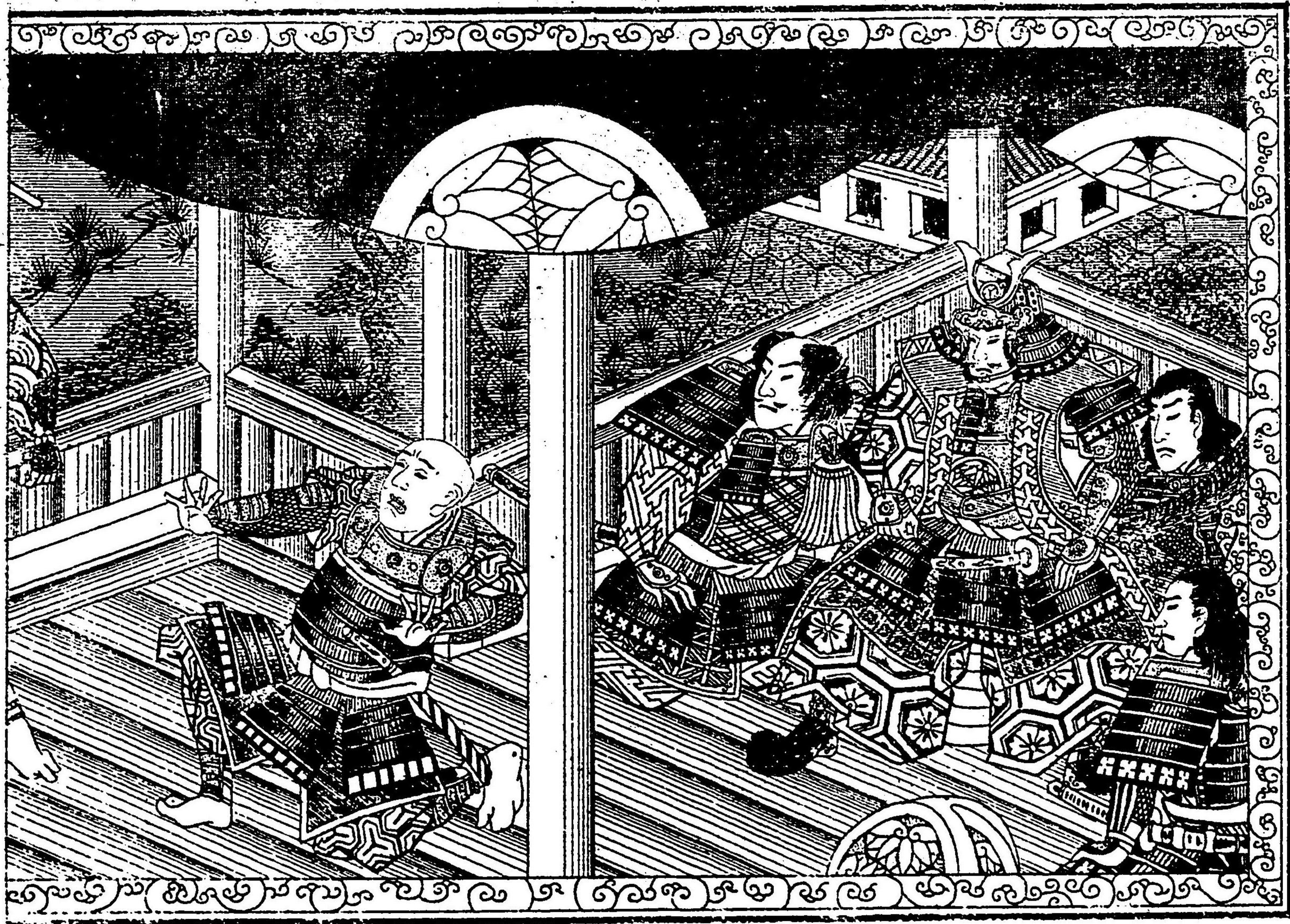
童子化身鎮在乱



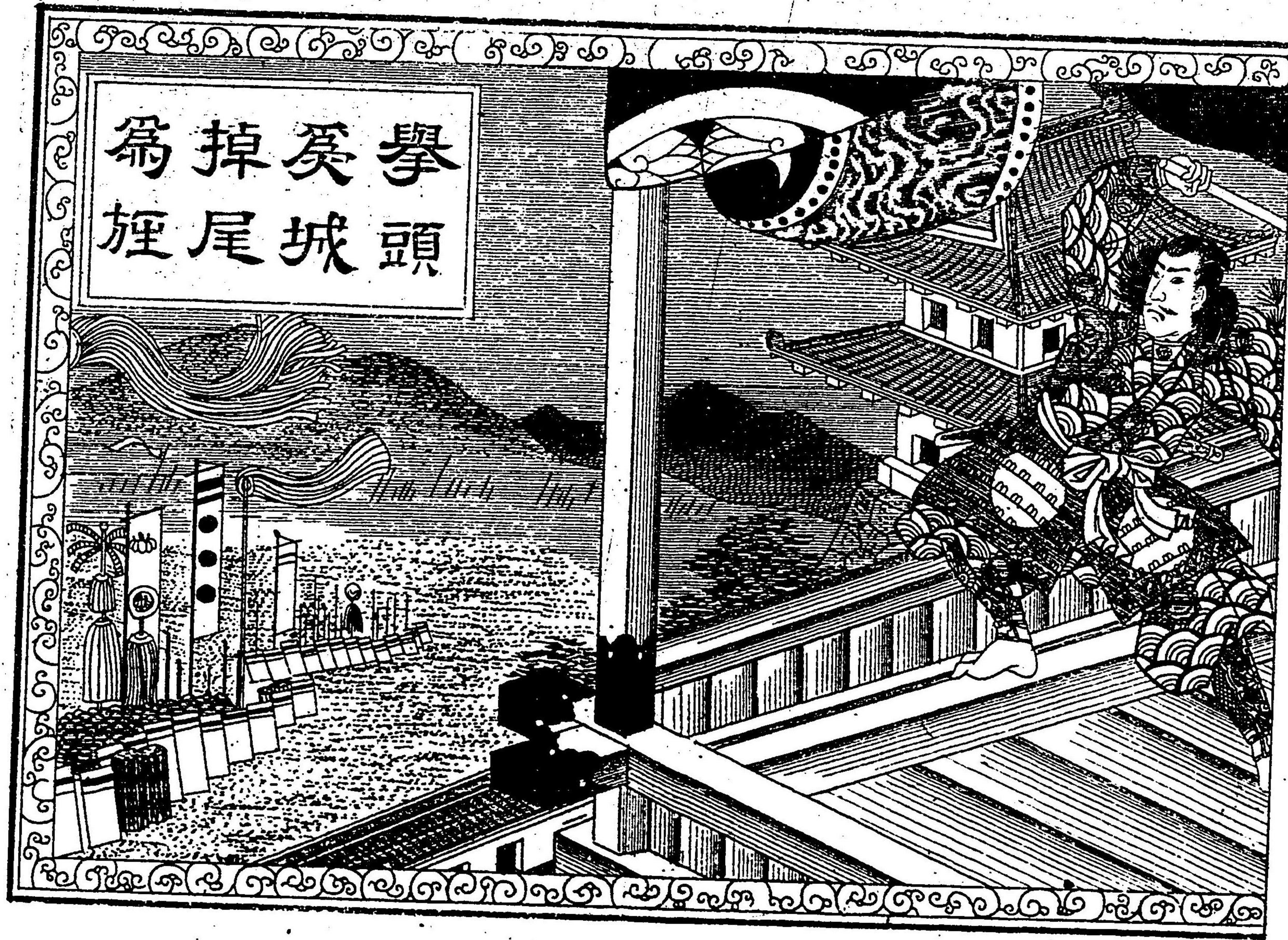
紫雲



No 11849



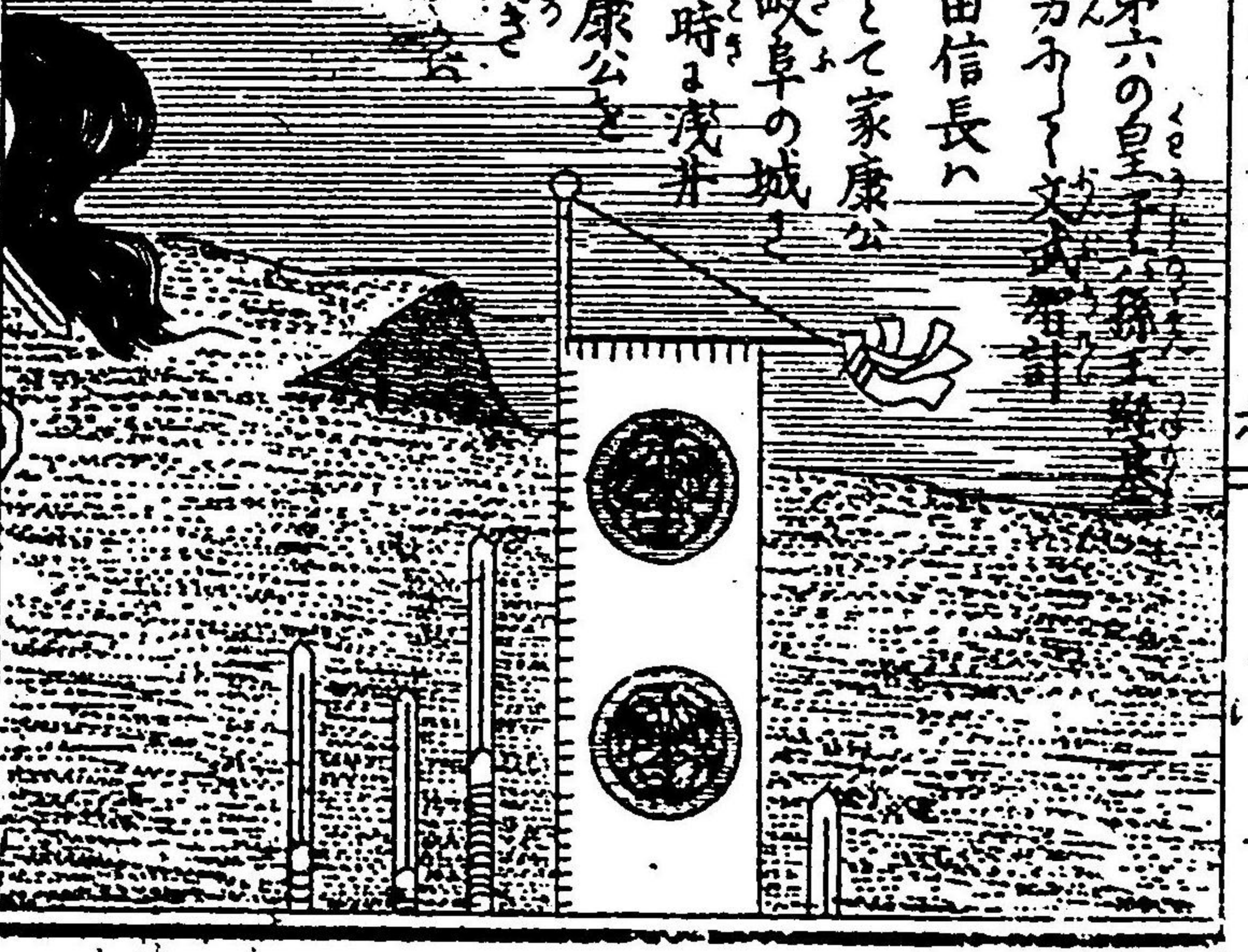
學 頭 城 尾 掉 為
頭 城 尾 掉 為





家康公

抑も東照宮と稱奉る清和天皇第六の皇子孫王親王
 の後胤三筋岡崎の城主徳川廣忠の男ありて文武兼計
 衆を勝たり茲は尾州清洲の城主織田信長ハ
 狂威を振ひ江加の浅井長政を討んとて家康公
 加軍を乞ふよ早速許容ありて岐阜の城
 出馬あり後久手筒山の城を取ると時淺井
 長政北越の浅倉と示し合せ信長家康公を
 挟討はるさんとのことを聞き大に驚き
 家康公の勢代捨て陣拂ひ及び
 家康公の苦戦大方ならん辛トて
 一死を免と帰城ある是を退口の
 難といふ家康公ハ又々信長
 の加勢とす元龜元年六月



廿八日江州姉川に出陣

陣あり屢挑む戦ひ

北越の剛将

真柄十下

家康公

左門本多忠勝が為

討れ浅井浅倉敗北とあり

君再び濱松の城に帰陣

家康公



此頃甲州の
信玄軍師山

縣三下兵三昌

影合下

駿馬山

辺を

押領は

民家は

立入り威

追放

或

米穀財宝を貪り

戻り乱暴ける

家康公聞ひ

其の手引使

是を討て

後陣は信玄あり

目影と調合世家

康を挾討し為え

家康公

血戦を民家は

遁れ

す



御生害の処へ平岩

親吉駈付御生害を止

めり是を天竜川

の北難と云夫

より家康帰

城の信玄

大軍を

纏めて

帰城ふさんと

足長濱松の

城下を過り

家康公



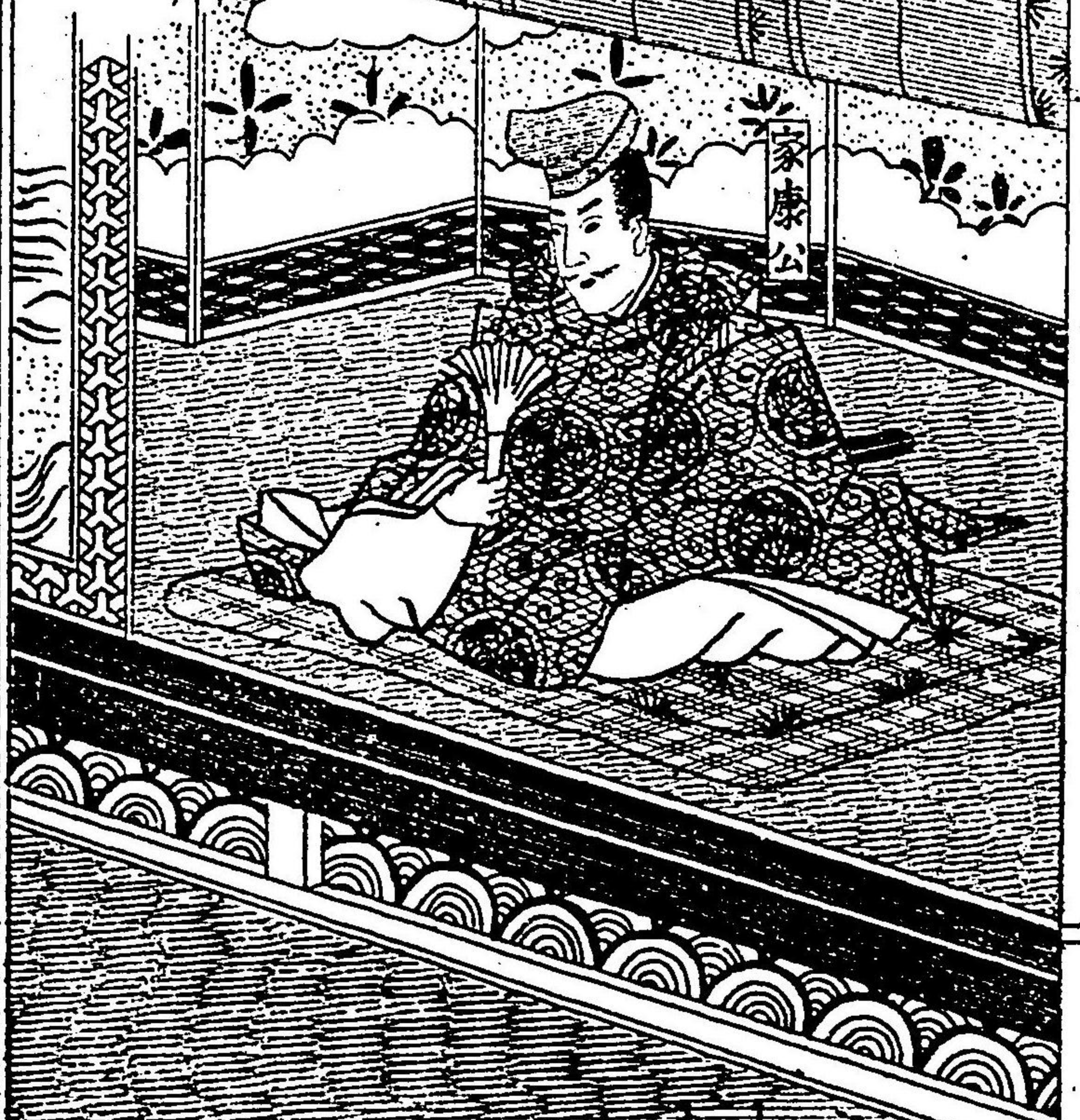
家康權より
見玉憤より
絶へに誰
信玄勢を追
討せよとの
命ふより
我後世
押出き此時
甲州勢備と
江原一飲の
受難い
家康利



あつて
三方原
を退き
天正元年
と改元あり信玄は盛
野田の城を攻んとす
菅沼定満松平与五郎
を励まし鉄炮を
つゞ打ようらよ
信玄面皮をかき
れ急し甲陽は退
翌年二月家康信長
が援兵を乞れ甲州の

一族室賀
葉軒の楯
籠る長
篠の城を
初め四ノ勝頼をも敗せ
め信長は討て信長光秀の

為る
なり
其後
天正十
年七月
家康
關東
御入国
あり
慶長三年
石田三成
返逆す



口打ふ
のひら
うは老病
わ次郎
重らせ
あひら
は家臣
の面
昼夜

開原を於て
是を亡び同

八年二月征夷大将

軍を任じ九年三月

職を辭し駿府より

隠居り慶長十九年秀頼を

長び其臣大野父子淀君の竈より

密に兵を揚ぐ因に家康秀忠父子大軍

を大坂に突かし合戦あり秀頼防戦

尽て落城し及びひらきしに家康公より

人数引まじり駿府城へは帰陣

ふあり夫より江戸御城へ入りせ
らに同二年三月の地常あらざと



看病

申上り甲斐

あく四月十七

日終草葉の

つゆとならうせのふ

御齡七十五才あり遺影

駿州九能山に葬りた

その後日光山に移

東照大権現と

稱し奉るあり



明治二十一年八月廿二日印刷

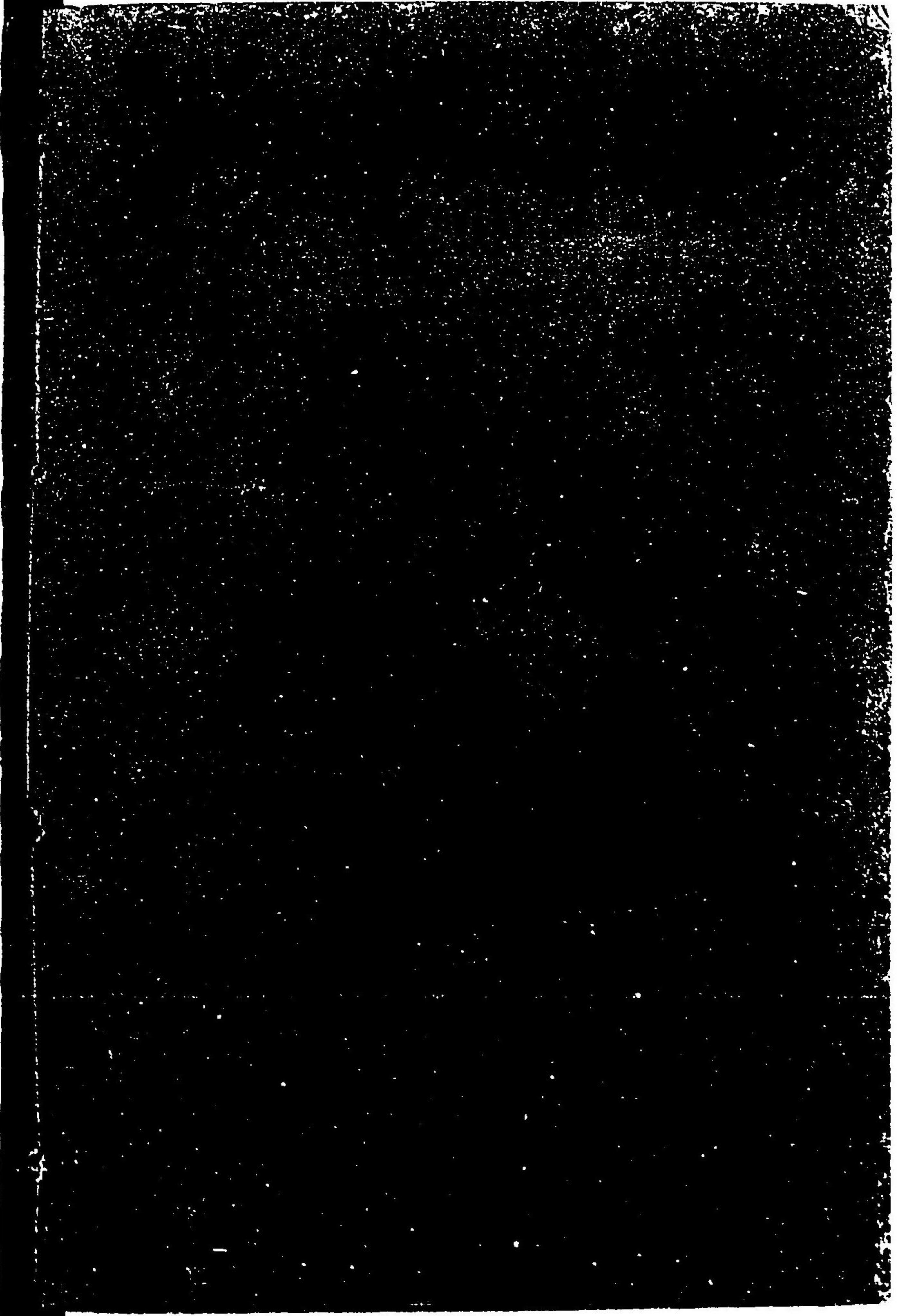
同年八月廿九日出版

發行 小川安造

著作兼 小川安造

印刷 小川安造

木野区藤町三丁目



家康公一代記

特60
330

091924-000-2

特60-330

家康公一代記

小川 安造 / 刊

M21

DBP-0033

